



分子研を去るにあたり

彦坂 泰正 新潟大学 理学部自然環境科学科 / 大学院自然科学研究系 准教授
(前 極端紫外光研究施設 助教)

異動のご挨拶

ひこさか・やすまさ / 1992年東京工業大学理学部化学科卒、1997年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了。分子科学研究所、物質構造科学研究所、英国オックスフォード大学での博士研究員を経て、2003年10月分子科学研究所極端紫外光研究施設助手。2009年9月より、現職。



分子科学研究所には、博士課程の3年間（特別研究学生）とその後の1年間（博士研究員）、さらに数年おいて、助手/助教としての約6年間、通算すると計10年間も在籍させていただいたこととなります。特に、助手/助教としての6年間はあっという間であったように感じます。これは、歳をとって月日が過ぎるのが早く感じるようになったためだけではなく、それだけ充実して楽しい日々を過ごすことができたからだと思っています。分子研の皆様、とくにUVSOR関係の方々には、公私に亘りいろいろお世話になりました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

UVSORは、2003年の蓄積リングの高度化とそれ以降に順次行われた挿入光源の導入により、真空紫外域では世界的に最も競争力の高い放射光施設の地位を維持しています。そのような先鋭的な施設であるUVSORですが、それに関わる誰もが昔から変わらず感じることで、それは他の放射光施設には無いアットホームさでしょう。これは、単にスタッフの面々の人柄だけではなく、利用者に優しい運用やサポートの体制等の全般的な印象から、そのように感じるのだと思います。面白そうな

データが取れつつあるので運転時間を延長して欲しい、とか、運転条件を変えて欲しい、というような利用者の我儘な要望を柔軟に聞き入れようとする放射光施設は、世界的にも稀有でしょう。一方、施設スタッフといえども施設の中に拘束されず、世界の他の先端的放射光施設で経験を積むことが奨励されていることは、数ある放射光施設の中でUVSORに特異なことのように思います。これは、他の施設での経験をフィードバックすることでUVSORの重点化の方向性を決めようという、施設長の英明な戦略によるものです。そのおかげで、私は後ろ髪を引かれることもなく積極的に外に打って出て、多くの経験を得ることができました。このような度量の広い施設のスタッフの一員であれたこと、またこの施設を利用して長期間自在に研究できたことは、大きな幸運であったと思っています。

大学に異動して、すでに数か月が過ぎました。研究所とは全くミッションの異なる地方大学の職場環境に若干は戸惑うこともあります。予想していたよりも居心地良く過ごしています。私は、放射光を用いた原子や分子

の電子状態や素過程の研究をしております。このような放射光を利用する研究は、実は（地方）大学の研究者にマッチしているかもしれないと感じ始めています。当然ですが、放射光を用いる実験は必然的にUVSORのような放射光施設で行うことになります。そのため、大学の研究室に大きな実験スペースが必須というわけではありません。また、放射光施設で共同利用に提供されている計測機器等を活用することにより、研究装置の全てを自分で賄わなくても研究の実施が可能です。

今後は、これまで以上にUVSORにお世話になりながら、研究を進めてまいると思っています。